

# 秋の企画展2 折元 立身展 1991→2005

2005年11月1日[火]—15日[火]  
12:00→18:00(最終日は17:00まで)  
休館日 6日,13日 入場無料  
会場:名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
●オープニングパフォーマンス  
11月1日[火] 16:00—17:00 B棟カフェテリア

世界各地で行われるパフォーマンスで知られる折元立身。近年では実母との生活を「アート・ママ」シリーズとしてパフォーマンスやコラボレート写真を発表。高齢化社会や家族との生活をテーマとした作品で注目されています。本展では1991年から現在までの新作も含めた写真作品、ビデオ、オブジェに加え、これまであまり発表されてこなかったドローイング作品もご紹介します。また会期初日にはパフォーマンスも行います。



## TATSUMI

**折元立身 (おりもと たつみ)**  
1946年生まれ。世界中で行われるパフォーマンスやこれらを記録した写真、オブジェ等で知られる。主な展覧会: シドニービエンナーレ(1988)、サンパウロビエンナーレ(1991,2002)、ヴェネチアビエンナーレ(2001)、横浜トリエンナーレ(2001)など様々な国際展に参加。



## ORIMOTO



**アート&デザインセンター**  
EXHIBITION 9 → 12  
SCHEDULE  
展覧会スケジュール  
Open 12:00—18:00  
(最終日は17:00まで)  
日曜・祝祭日休館  
但し、10/10,11/3は開館します  
【入場無料】どなたでもご覧いただけます。

9/20[火]→9/28[火]  
9/30[金]→10/5[火]  
10/8[土]→10/19[水]  
10/21[金]→10/26[火]  
11/1[火]→11/15[火]  
11/18[金]→11/28[月]  
11/30[水]→12/7[火]  
12/9[金]→12/14[火]  
12/16[金]→12/21[火]  
12/22[水]→1/6[金]

モール — 4思いがけない産物店 —  
書道芸術演習・作品展  
秋の企画展1 — 浸透する領域—  
Height.Width.Depth MEDIASELECT 2005  
幼稚園児たちのゲイジツ展  
秋の企画展2  
折元立身展 1991—2005  
西方からの提言#4 アルベルト・ゴンザロ + 松岡 徹  
境界から見えるもの(仮)  
工芸選択コース作品展  
名古屋芸術大学後期留学生作品展  
冬期休館

Art & Design Center  
名古屋芸術大学アート&デザインセンター 〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町 tel.0568-24-0325 fax.0568-24-0326

# B!e



## 特集 Fieldwork 『フィールド・ワーク』

「フィールド・ワーク」を定義づけることはなかなか難しい。なぜなら学問的、職業的、あるいは趣味的なアプローチ等において広く用いられる言葉であるからだ。またアートやデザインの領域に限ったとしても、「フィールド・ワーク」を創造行為における有効な手段と考える人は多く、その人の数だけ方法論は存在するであろう。しかしいずれの場合でも、外部空間としての「フィールド」におもむくことからスタートする点において大差はないはずである。ここでは表現におけるひとつのプロセスとしての「フィールド・ワーク」について、報告を行いたい。

秋に本学アート&デザインセンター企画による展覧会が開催される。メディアアートとデザインの領域に関わる作家と作品を紹介するもので、本学の企画展としてこのジャンルでの開催は初めてとなる。タイトルは「Height. Width. Depth MEDIASELECT 2005 (浸透する領域)」である。「Height. Width. Depth (高さ、幅、奥行き)」とは私たちの生活空間そのものを意味する。その中に存在しながらも、人間の物理的移動、精神状態あるいは社会制度などによってめまぐるしく変化する情報。それらに到達するための引き出し(インターフェース)を各作家は様々な形態と表現手法により提示する内容である。現在進行形で立ち現れるメディア表現を学生たちに体感してもらえよう。招待作家の一人、中居伊織氏には展覧会に先駆け7月にレクチャー、そして8月には新作制作のためのワークショップを行っていただいた。

今回の展覧会では、中居氏に4つの作品を展示いただく予定である。いずれも「streetscape」という街の音風景をインタラクティブな形で体感できる作品である。4つのうち1つは新作をお願いし、本学の最寄り駅である名鉄犬山線、徳重・名古屋芸大駅を中心とする400メートル四方の空間で、学生向けのワークショップという形で実際に音素材を取材することとなった。バイノーラルマイクという左右の耳に装着し、まるで「録る」というよりは「聞く」ような収録機器を用いての素材集めである。これにより人間が実際に「聞く」とほぼ同じ状態で音が収録されるのである。ワークショップにはデザイン学部1~4年生まで32名が参加した。約10名ずつ3つのグループにわかれ、事前に中居氏が指定したポイントを地図上から拾い上げ、そこでの音を収録する。収録時間は各箇所1分15秒とルール化された。録音ボタンを押し、息をひそめると様々な音が意識下に飛び込んでくる。車、セミ、飛行機、自転車、工事現場の溶接などなど。世界の大きな時間軸という流れからあえて1分15秒を切り取り、それを収録していくと、ひとつひとつの音が偶然性のもとに次から次へと、まるでプログラムされていたかのように立ち現れるのを感じた。

中居氏はワークショップ終了後、学生に向けて「音の採集というフィールド・ワークをすることで、あらゆる事象が『奇跡の連続』として存在しているのだと感じられるようになった」と述べられた。

デザイン学部の1年生に対して行っている実技の一課題に「フィールド・ワーク」を行い、そこで得られた情報を編集しファイル化するものがある。「絵を描く事が好き」ということを美術・デザイン系大学に入学する動機付けとする学生が多い中、この課題はもともと難解にとらえられる傾向にある。課題そのものを理解することに多くの時間が必要となるが、作品完成時には今までにない充足感を得られたとコメントする学生が実に多い。表現・造形行為は内から湧き出る創造的力をゼロから構築していくことであると錯覚されがちである。しかしフィールド・ワークのように創造的なモチベーションを外部に依存し、それを自分という編集装置を用いて形に変換することも一方で重要な表現行為であると言える。

フィールド・ワークで学生それぞれが収録した「奇跡の連続」がいかに編集されたかは、10月開催の展覧会でぜひ体感いただきたい。  
池側隆之 デザイン学部メディアデザイン・コース講師



秋の企画展1 — 浸透する領域—  
Height.Width.Depth MEDIASELECT 2005  
10/8[土]→10/19[水]  
12:00—18:00 最終日は17:00まで 休館日 9日,16日  
会場:名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
主催:名古屋芸術大学  
共催:メディアセレクト  
企画運営:名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
Height.Width.Depth MEDIASELECT 2005 展実行委員会

編集後記  
本誌でも何度か紹介しているブレイメン・ナゴヤアートプロジェクト2005がいよいよ始まります。すでにドイツ側から17名の作家が来日しており、先日メイン会場となる元味蔵でのウェルカムパーティが開かれました。彼らは来日直後から展示会場となる街を歩き、そこに住む人々・街の歴史を探りながら準備していた作品プランを「場」との関わりの中で完成させていきます。迎えた日本側は16名の出品作家に加え、多くのサポートスタッフが参加しました。1年半にわたる準備のプロセスを振り返ると、このプロジェクトが町の方々の温かい協力なしには成し得なかったことは明らかです。これも実行委員会メンバーによる地道なフィールドワークが実を結んだ結果と言えるかもしれません。

B!e Vol.10  
発行日 2005年9月17日  
編集 江坂康里子(アート&デザインセンター)  
発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町徳重西沼65  
Tel.0568-24-0325 Fax.0568-24-0326  
E-mail adc@nua.ac.jp  
URL http://www.nua.ac.jp  
デザイン 岩田知人(サンメッセ株式会社)  
印刷 サンメッセ株式会社  
2005 Printed in Japan  
© Art & Design Center, Nagoya University of Arts



最寄りの交通機関をご利用の場合  
名鉄犬山線(地下鉄龍泉寺駅乗り換え)  
徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分  
※歩行・乗合電車の場合は西春日井駅で東線電車に乗換え下車してください  
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください  
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります  
自動車をご利用の場合  
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。



## 「しなやかな布」Rud Witt展

2005年7月1日 - 13日  
名古屋芸術大学アート&デザインセンター



ドイツのハンブルグから本学客員教授として招聘した女性作家のルド・ウィット氏。アート&デザインセンター全体を使って個展を開催した。布によるインスタレーション「しなやかな布」と題した展示である。自身で染色した布を1,000メートルも持って来ての展示である。屋外には風雨に晒され自然にまかせることによって完成される作品。スタジオスペースには平面的にピンと張った布に穴があいており床には塩が砂浜のように敷かれている。絵画的な空間が美しく感じる。小さなギャラリースペースには白い布を箱型に吊るし、静かな東洋的な空間を醸し出している。大きなギャラリースペースには90センチ幅の布が隙間無く襜を伴い床に敷かれている。暗く微妙に異なる紫色の波型をした空間はただ深々とそこに在る。インスタレーションの作品には珍しく純粋芸術、つまりアートの根幹であるリアリティを追求する作品である。今回展示された作品の一部は最終工程を学生たちとともに創り上げ、設置作業もともにを行った。このことは大いに学生たちを刺激したようだ。特に女子学生にはこれからアートを続けていく勇気を与えたようである。

美術学部絵画科洋画コース教授 原田 久

## 「ガラスのかたち」

2005年7月26日 - 9月25日  
金津創作の森 アートコアミュージアム-1 (福井県芦原市)

1960年代にアメリカで提唱された「スタジオガラスムーブメント」によりガラスは造形表現の新素材となり、日本でも多くの作家が活躍している。今回、国内外より14名の作家と1組の作品70点で構成された会場は、4つのグループに分かれている。北泰子やポール・スタンカードらによる伝統的な美意識と技術に



による繊細さを表現したグループ、塚田美登里、アン・ヴォルフらの作品はキャスト技法によって制作され、ボリュームとフォルムへのこだわりを強く感じさせる。漆山みさきやヌーシュ・ワレンテュニョックらはテーマも形態も自由なアイデアで作家の内面性を暗示させる作品となっている。また場所との関係性をさぐったインスタレーションのグループでは、美術館の外壁を展示場所を選んだ行武治美、奥まった空間を異質な空間へと変化した辻和美、大きなパブルのようなガラスを軽やかに空中に浮かせて展示したマイケル・シャイナー(本学造形科工芸選択コース教授)は見るもののイメージネーションを刺激する。大阪のクリエイティブユニット「graf」による会場デザインがそれぞれの独自性を際立たせ、ガラス素材の幅広さと可能性を感じさせた。

## 河崎アートスクール 2005

2005年7月15日 - 7月31日  
伊勢河崎商人館および河崎のまちなか

かつての水運と蔵の街、三重県伊勢市河崎町において今年2月と7月の2度にわたって「河崎アートスクール」と呼ばれるアートイベントが行われた。地元アーティストや町造り衆、招待アーティスト達がそれぞれの立場からアートのあり方や学びの場について考える催しである。石松丈佳氏によるこの企画はアートをいわゆる町おこしのカードとして使うのではなく「町とは何であるのか」「学びの場とは何であるのか」という本質を考えていく場を提供することとなった。そのアートスクールの始業式に相応しいこの企画はこれで終了した訳ではなく、まさに始まったばかりである。村田仁氏の「我が町」と「町が我(まがわれ)」の2月と7月で対になった詩と映像詩は町の本質をとらえる象徴的な作品となった。津田佳紀氏による象徴的な町・伊勢の生み出した地域紙幣についての講義もあり、それに対しての地元の方々の活発な反応も興味深い。



小生の作品「河崎文庫」は町の架空の歴史を文学・学術文庫として積極的に誤認するというものであり、7月の作品「青空美術学校」では教科書を作ることを教え、認定するという、「学校・教科書」という媒体を通して教育の本質を考えるというものであった。地元古書店「ぼらん」の協力による古教科書探訪会もあり、フィールドに椅子と教科書というインスタレーションの場では、地元の映像作家、長尾正男氏の町の映像や大阪万博の8ミリ映画会なども行われ、大いにもりあがった。 デザイン学部非常勤講師 山田 亘

## RELAY ESSAY

### 名古屋城の殿様って誰ですか? …… 岸野俊彦

今年には愛知万博にあわせて「名古屋城博」が開催され、金鯱が地上に降りて評判になりました。名古屋城は、徳川家康が威信をかけて江戸城・大阪城同様、諸大名を動員して作った巨城です。名古屋祭は三英傑行列として織田信長・豊臣秀吉・徳川家康を顕彰しますが、江戸時代に三百年近く名古屋に居城した尾張徳川の殿様の影はありません。テレビドラマでは「水戸黄門」をやっています。「黄門」は「中納言」のことで、水戸の殿様は中納言とまりでした。尾張の殿様は大納言になれ、水戸の殿様よりあらゆる面で格上でした。「暴れん坊将軍徳川吉宗」は尾張の殿様より格下の紀州の殿様でした。ところが、将軍に跡継ぎがなく、尾張の殿様が早死したので将軍になれたのです。織田信長が命名し整備した岐阜町も、信州木曾路の宿場や木曾山林も尾張徳川領でした。このことは名古屋の人も岐阜の人もあまり知りません。先日、大阪の研究者と議論しました。大阪は「秀吉の大阪城」と「商人の町」というイメージがあります。実際は、秀吉の大阪城は徳川軍に破壊されました。江戸時代の大坂城は、家康が秀吉時代より巨大に創られたものです。

幕府は徳川大阪城を西国支配の最重要軍事拠点としました。大阪は「商人の町」とともに、江戸や名古屋と同様の最も重要な軍都でもあったのです。明治維新で徳川幕府は敗北し、「賊軍」となりました。現在の「靖国神社」は、この時期延べの戦死者を祀るために創られたのが発端です。このため幕府軍や西南戦争の西郷軍戦死者は「賊徒」とされ祀られていません。薩・長藩閥政府の中で地歩を得るために大阪商人は近世徳川との繋がりを必死に消そうとしました。これが「大阪は商人の町」であり徳川大阪城でなく、豊臣大阪城イメージに結びついたのです。廃藩置県後の愛知県知事は、薩・長等の出身者が明治政府によって任命され、名古屋城の金鯱は明治政府に献上されました。名古屋祭の三英傑史観もこれと無縁ではなく、江戸時代の歴史の事実を覆い隠す役割をはたしています。歴史的に創られた「歴史の虚像」を引きはがし「歴史の真実」に迫ることは、研究と教育に携わるものの大切な課題だと思います。

音楽学部教養部会教授

池側先生から、大学院の授業でフィールド・ワークをベースにしたような授業をして欲しいと依頼を受けた。私事であるが、神戸出身で、学生時代を京都、現在は滋賀…と、ずっと関西に住みつつ、気がつけば少しずつ東へと向かっている私にとって、週に一回名古屋へ通うということ自体が新鮮な体験であり、引き寄せられる流れのようなものを感じて、すぐにOKした。

このように、外からやってくる因子を取り入れ、自分の中でストーリーを紡ぎながら物事を構築していくというのが、私の癖である。それは人生も、企画や創作活動においても全て同じで、他ならぬこの授業もそんな作り方をしようと思った。

授業が始まる数ヶ月前、我々は早速フィールド・ワークを開始した。と言っても、まずはフィールドそのものを見つけなければならない。池側先生に車で連れられて、名古屋周辺地域をぐるぐるとまわった。それは言わば、グリーンの見えないゴルフコースのティショットのようなもの。あるいはピリヤードのプレイクショットに例えるのも面白い。第一打が投げられたことにより、外部因子は変化をはじめ、またそれらの作用が白球の置かれる環境を形作る。

そして、我々はいくつかの街の中から「一宮」にねらいを定めた。

特集 Field work

『フィールド・ワーク』  
物語をつむぐこと  
谷本 研(大学院美術研究科/デザイン研究科 非常勤講師)



授業の途中、数名の学生から「一宮を好きになれない」と言われ、ショックを受けたことがある。その言葉に違和感を覚え、少し悩んだ時期もあった。しかし、後になってあることに気がついた。そういう学生の多くは美術系なのである。

つまり、元来、自分の好き嫌いに関わらず、依頼に基づき、それをよりよく表現することで依頼主の要求に応える「デザイン」に対し、「美術」の場合は、モチベーション(=モチーフ)自体を自分の中から見いだすことがよとされる。「好きになれない」という発言は、そんな「美術」的思考から、まず自分のモチベーションに昇華させようとする過程から生じた、ごく自然で責任感のある言葉だったのではないだろうか。

私ももともと美術を専攻をしていた者として、そんな彼らの信念を尊重しつつ、いつもは無意識的に「好き嫌い」のフィルターでそぎ落とされている情報の中にも、創造活動における大切なヒントが隠されているのだということを伝えたかった。逆に、デザイン系の学生に対しては、与えられた命題を単なるノルマとしてこなすだけではなく、自分のモチベーションに転化させることの大切さを知ってもらえればいだろう。それは、表現に対するリスクを自分自身で背負うということである。

授業の締めくくりは、フィールド・ワークの中で見つけた場所へ迎えた。「一宮迎陽館」という、もともと料亭だった古い建物で、かつては一宮の繊維業者が、商談や接待に多く使ったという、この街の記憶が深く刻まれた場所である。そして、発表展示の期間を、7月28〜31日の「一宮・七夕まつり」にぶつけた。「日本3大七夕まつり」のひとつに数えられ、この街がもともと活気づく目である。ちょうど前期授業が終わる時期に重なることもあり、この巡り合わせを大切にしようと考えた。

学生たちの作品がはじめてひとつの空間に集まった。フィールド・ワークの方法論を自然に消化した作品、それを逆手にとって鑑賞者に発見を促す作品、そこから得た情報を自分なりの表現手段に取り入れた作品、あるいは情報素材を新たなメディアに落とし込んだ作品、…など、様々な表現が見られた。

それぞれに違った「ものさし」を持つ者どうしの作品が一堂に会すること、そしてその合評というのは、スリリングな出来事だったといえるのではないだろうか。それは互いの判断基準を意識する作業であり、ニュートラルな位相に身を委ねることである。

この「ニュートラル」という言葉が、フィールド・ワークにとっても大事なのではないだろうか。ここでいう「フィールド」とは、もちろん「現場」といった意味合いが強いと思われるが、私は「ニュートラルな原野」というイメージを持っている。冒頭の例えになぞらえるなら、造成される前のゴルフコースだ。自然の凹凸を見据えながら、自分自身でグリーンやホールをつくるのだ。そこで繰り広げられるゲーム(=物語)の可能性は無限にある。

風を読んで次のショットを考えよう。「フェアウェイはどっちだ?」



30数名という大所帯で授業がはじまった。「映像表現演習」という枠だが、映像専攻の学生はおらず、美術専攻・デザイン専攻の混じった授業となった。逆に考えれば、「映像」とは、それら両ジャンルをまたぐことのできる包容力を持った概念といえる。現に、大学などで映像専攻は、美術科に属する場合とデザイン科に属する場合がある。「映像」を軸に、両科の学生が入り交っていたということこそ、この授業の本質であり、難解かつ意義ある命題だったのかもしれない。

週ごとに講義やディスカッションを織り交ぜながら数回のフィールド・ワークをおこなった。おおまかに言えば「出会い」「情報収集」「編集」というプロセスで、最終的に何らかの形で作品化させることにした。

学生の中には、フィールド・ワークの方法論に慣れていて、現場に行く前から期待に胸を膨らませている者もいれば、現場に赴いて何をどうすればいいのか戸惑う者、また「なぜ一宮なのか?」という根源的な部分から頭を悩ませていた学生もいた。

ここで確認しておく必要があるだろう。今回の授業の目的は、学術調査のためでも、町づくりのためでもない。フィールド・ワークを通じて、偶発的に起こる事象も含め、得た情報を意図的に編集するというプロセスに、創造活動における大切なエッセンスを見いだそうとするものである。

そして一宮は、私自身これまで何の関わりもなかった場所であり、今回ここを選んだのも、なんとなく「匂い」を感じたからとしか言いようがない。しかしながら、そういった偶然性も含め、自分に降り掛かってきた事象を取り込んで解釈し、学生自身がそれぞれの「物語」を紡ぐことができるのではないかと考えたのだ。

